



特250
536

蘇峰 徳富猪一郎先生講演

梨木神社祭神三條兩公御事蹟に就て

梨木神社鎮座五十年記念祭奉賛會

始



持 250
536

開會の辭

(昭和十年十月八日京都寺町通山口會館に於て)

奉贊會副會長 田 中 博

甚だ僭越でございますが、私は主催者側即ち梨木神社奉贊會の役員を致して居ります關係上、徳富先生を御紹介券々一言御挨拶を申上げたいと思ひます。

寺町通廣小路上の所に鎮座します梨木神社は、本年恰かも鎮座五十周年に相當致しますので、各奉贊會御本殿を始め諸々の建物を修繕、改修或は新たに神門をしつらへ、神苑を整理する等、社頭の簡易を一新致しまして、去ぬる一昨六日から本日まで三日間に亘りまして、祭儀を誠に盛大に嚴肅に行ひました次第であります。此の機會におきまして兩御祭神の御事蹟に付て、徳富先生を煩はしまして御講演を願ふことになりました次第でございます。

徳富先生は、餘りに有名なお方でございまして、私が茲に彼れ此れ蛇足を申上るまでもなく、皆さん御承知の方でゐらつしやいます。今夕の催しに付きましては皆さんが御贊同下さいまして、斯くも多數御來聴下さいましたことは、主催者側と致しましても誠に光榮至極に存する所でありまして、厚く御禮を申上げます。是より徳富先生に御講演を願ひますから、何卒御清聴あらんことを望みます。(拍手)



梨木神社祭神三條兩公御事蹟に就て

蘇峰 徳富 猪一郎

只今御紹介になりました通り、私は本日梨木神社鎮座五十年の祭典に就きまして、聊か私のお話をす
る爲めに罷り出しました。

凡そ世の中に偉いお方も少なくありません。併しながら親子揃うて同じ道を歩き、親子揃うて志を同
じくし、親子揃うて同じ目的に向つて進み、而して親子揃うて其功を遂げ、其志を成したと云ふ方々
は、極めて少なくあります。例へば楠木家の如き。例へば菊池家の如き。さう云ふ例がまゝあります
けれども、決して多くないことであります。但だ近來に於て特に著しく私共の目に映するものは、即
ち梨木神社に祀られてをられる兩柱の神様、即ち忠成公と三條實美公の御父子でありまして、此の如き
は實に稀有の例と申さねばなりません。私は是から御父子の事に就て、少しくお話を致します。けれど
もお理りを申して置きますが、少しくと云ふのである。若し此お二人の事を詳しくお話をすれば、嘉
永時代より明治時代の帝國議會開設に至るまでのことを、お話ししなければならぬから、即ち近世日本の

最も重要な歴史をお話することになりますのであります。とても今夕少しの時間でそれが出来る筈があり
ませぬ。それで極めて概略的にお話を申すのである。併し私が概略をお話申すからして、それ以上の事
は知らないとお考へ下さるなら、私は甚だ不服である。私は『近世日本國民史』を書いて、既に十七箇
年を過ぎて居るのである。其間に於て此の御父子の事に就ても研究したばかりでなく、澤山書いて居る。
今尚ほ書きつゝあるのである。本日お話をすることは、私の知つて居ることの、極めて少ない部分をお
話するのであるといふことを、御承知願はなければなりません。

第一歴史を觀るのに、吾々が氣を付けねばならぬことがあります。それは即ち協力と云ふことである。
力を合せると云ふことである。歴史は決して一つの力で出来たものではない。單純の力で出来たもの
はない。凡有る力が相ひ錯綜して出来たものである。協力若くは反對、押したり、引いたり、種々の力に
依つて、歴史が出来て來ますが、今日は其力の作用の中の、協力と云ふ點に就て申します。

例へば一つの例を掲げて見れば、人間の力と天然の力と云ふものが、よく協力をする必要がある。極
めて近き例を申して見れば、對馬水道に於て、バルチック艦隊を東郷提督が邀撃つた時に於ても、天氣
が東郷さんに味方をした。若しあの時に濃霧があり、敵艦の近付くと云ふことを豫め見ることが出来な
かつたならば、如何に東郷さんが、鬼神を欺く策謀を有つて居られても、如何に我が艦隊が勇壯無比で
あつても、亦た無類の熟練を積んで居つても、其志を達することは出来なかつた。然るに此日天氣晴朗浪

高し、天氣がハッキリして、視野が遠くに及んだからして、遂に敵艦を適當の所で遊撃つことが出来た。又た伏見、鳥羽の戦の時に於きましても、徳川勢が大坂から攻上つて来る時に於て、薩長の兵が之を伏見、鳥羽で遊撃つた。其時比叡風が吹いて来て、盛んに吹いて、石とか砂利とかと云ふものを、殆んど吹飛ばして、徳川勢は顔を上げることも出来ない。然るに此方は其勢ひに乗じて、ドシ／＼向ふを撃つて行つた。即ち風が官軍に味方した。風と官軍と協力して、徳川の勢ひを撃破したのである。又例へば新田義貞が鎌倉に攻込んだ時に、稻村ヶ崎に潮が引いた。それであるからして、容易く鎌倉に入ることが出来た。即ち潮が引いたのは、潮が引く自然の時期になつて引いたのであるか、新田義貞が寶刀を龍宮に獻じたから、龍神が引かしたのであるか、何れにしても新田義貞と潮とが一致して、鎌倉入りを成就せしめたのである。

斯う云ふ例は澤山ある。例へば英吉利のコブデン、ブライトと云ふ人が、穀物條例を廢止する運動を起した。穀物が外國から入つて来るのに、重税を課すると云ふことは宜しくないと云ふ運動を起したが、なか／＼地主や何かと聞かなかつた。然るに或年にアイルランドに於て大飢饉があつた。大凶作になつてジャガ諸も何も皆腐つて、食ふ物が無かつた。其の爲めにもう穀物に税を掛けるなど、云ふことを云つて居ては、人が皆な餓死しなければならぬ。それで容易く議會も穀物條例の税を掛けると云ふことは廢めると云ふことになつた。即ち飢饉が穀物條例の反對に應援して、遂にそれを廢止せしむるやうになつて

來た。斯う云ふ例は澤山ある。是は人間の力と自然の力との共同一致を申上げたのであります。そればかりではない。それよりも大きく見てみれば、精神的の理想主義、物質的の現實主義と云ふものが一致して、初めて大いなる運動が出来ること、英國の革命を見ても、佛國の革命を見ても、米國の獨立戦争を見ても、皆分り切つて居る話であります。

外國のことは姑く措いて、我が維新の運動の如きも、一方から見れば、封建制度が分解して行く分解運動である。他方から見れば、皇室中心の結成運動である。更に一方から見れば、外國の壓迫で日本國民が、國民的精神を奮起したる運動である。封建制度はガラ／＼毀はれつゝある。尊皇の思想は皇室を中心として、自然に結晶しつゝある。外國に對する國民精神と云ふものは、多年培はれ、養はれたるものが、勃然として頭を擡げて來た。是等の力が皆合して、茲に始めて皇政維新と云ふものが出来上つたのである。それで皇政維新と云ふものを、己れがやつた。吾がやつた。自分だけの力で出來たと思ふのは、大變な間違であつて、自分も幾らかやつたに相違ないけれども、自分以外のやつた者の多いと云ふことも、忘れてはならない。昔から犬の骨折り鷹の功名と申します。鳥一羽捕るにさへ、兎一疋捕るにさへ、なか／＼協力が要るのである。勢子も要る、犬も要る、鐵砲も要る、容易な事ぢやない。總てのものが力を合せて、始めて此に大いなる事は出来るのである。

それで吾々は、維新の大改革に就ては、餘程考へなければならぬ。或者はこれを以て、單に封建制度

が分解したる一つの作用と見る。大名が大阪商人に首の根ツ子を抑へられて、頭を上げ得ないやうになつた。所謂る封建武士が富の力に壓迫せられて、此に始めて所謂る資本主義の新なる運動が起つたと、斯う云ふ風に見る人もある。或人は、是は實は高山彦九郎やら、頼山陽やら遠く言へば水戸光圀やら、更に進んで云へば、昔の楠公やら、或は菊池やら、凡有る忠臣義士、勤王の思想の結晶で斯うなつたと云ふやうに見てゐる。或は又はは所謂る外國が日本を刺戟したからして、慨然として國民的精神を起して、優柔不斷なる幕府を顛覆したと、斯う云ふ論もある。何れも相當の理窟がありますからして、それ〴〵に相當の道理だけの分前を與へて、さうして物事を判断しなければならぬ。鷹は己れだけの手柄、犬は己れだけの手柄、人間は己れだけの手柄だと云ひますけれども、一匹の兎や、一羽の雉を捕るさへも、鷹や、犬や人間其他のものゝ協力に依つて成ると云ふことを見れば、大いなる運動が、決して單純に出來上るものでないと云ふことは、御承知にならなければならぬ點である。扱て是からは一歩進んで、同じく人間の仕事に於きましても、維新の大改革と云ふものに就きましては、果して誰が最も力を效したか、是からが私のお話する本題に入るのであります。

同じく日本國民と申しましても、日本國民の中には種々の種類がある。公卿があり、大名があり、士族があり、浪人があり、百姓があり、町人がある。封建時代に於ては同じく日本國民と申しましても、國民の中に種々の階級が出來た。階級が日本國民の中に有るがよいか、無いがよいかと云ふ論になれば、

私は無論ないがよいと云ふ論である。所謂る一君萬民の考へを持つて居る。君以外には日本國民に階級などゝ云ふものゝ存在を許すべき筈でないと云ふのであります。併し歴史は斯うあらねばならぬと云ふことを論ずることは差支ないが、斯うある、斯うであつたと云ふことゝ、斯うなからねばならぬと云ふことゝ、混合する譯にはゆかない。事實は事實として、ハツキリ言はなければならぬ。封建時代に於ては、儼然として日本には階級は存してゐた。其の存してゐた中に於て、最も著しい階級は、公卿と武家とである。然るに維新のことを考へる人々は、是迄大概日本の維新と云ふものは、武家の力で出來たと、斯う思つて居る。武家の力で出來たと云ふことを思つたのは、決して今日に始まつた話ではない。建武中興の時でも、足利尊氏などは、己れの力で出來た、それで己れが元勳でなくちやならないと云ふ。これが足利尊氏等の考への間違である。維新の後に於ても、士族共が、明治維新は己れの力で出來た。もう少し己れ共には割前を餘計よこすべき筈であると云ふので、いろ〴〵の騒ぎを起した。不平を起した。これが又た間違である。公平に考へて見れば、維新の改革に就きましては、公卿の力も決して少なくない。武家の力も少なくない。公卿でも武家でもない所の普通の民人の力も亦決して少なくない。總ての協力を依つて、出來たものである。

併しながら、先づ其中で主なる人を申して見れば、例へば大名の中から候補者を選んで見れば、或は水戸の烈公、或は島津齊彬公、或は松平春嶽公、或は徳川慶喜公、斯う云ふ人々は武家を代表したもので

ある。士族と云ふ仲間から申して見ますれば、或は藤田東湖、或は西郷、大久保、木戸、潮つて云へば橋本左内、吉田松陰是等の人々は皆な士族である。地位の高い士族か、低い士族かと云ふことは姑く措いて、兎も角も刀一本差すものは、士族と云はなければならぬ。然らば其外には力を盡したものはないかと云へば、公卿の力がある。ところが公卿は——此には或はお公卿様の御後裔がお出でになりますから、公卿など云ふことを申すのは、失禮な言葉のやうでありますけれども、私は今夕は歴史家の態度で申しますから、何卒御容赦を願ひたいと思ひます。——昔から無勢力のものと見られて、青公卿など云つて、先づ力は無いものと、始めから勘定されてゐたので、それで大概の歴史家は公卿を、先づ算盤の勘定の中に入れてない。零を付ければ零でも算盤の中に加はるけれども、零と云ふほどにも公卿の値打を買つてゐない。全く無視して居る。併しこれは大變なる間違である。歴史家は、兎角偏見にとらはれ過ぎるものでありまして、或時は佛教徒を大變無勢力と見て、日本の歴史から佛教と云ふものを除外して、日本の歴史を書かうとした者がある。現に書いたものがある。併し日本の歴史に佛教を除いたならば、丁度鯛の料理をするのに、刺身になる所の身をすつかり取つてしまつたやうなものである。佛教が日本の文化に勢力を及ぼしたと云ふことは、實に大したもののである。それで偏見を去つて考へて見なければなりません。

最も武家の勢力のあつた時分、殆んど武家全盛の時に於てさへも、公卿と云ふものは決して無視するこ

とは出来なかつた。頼朝の時代に於て、兼實公がどの位偉い働きをしたかと云ふことは、皆様方も御承知でありませう。又た豊太閤の時に、今出川晴季と云ふ方が、どの位いろ／＼の事に参畫したかと云ふことも、皆様方は御承知である筈である。家康公の時代に於ては二條昭實公、此人が所謂の公家諸法度を作ることに盡力された方である。又た徳川六代將軍の時には、近衛基熙公と云ふ方が、新井白石などと御相談になつて、殆んど江戸の政治を改革に著手せられた。武家全盛の時にさへも、公卿と云ふものは、なか／＼是は無視する譯にはゆかない。何故に公卿は無視する譯にゆかないかと云ふと、公卿が一番天皇陛下に接近して居るものである。苟くも事の天皇陛下に關係ある時に於ては、最も天皇陛下の御側近に居るものを無視する譯にはゆかない。それで如何なる武家全盛の時に於ても、如何に天日が晦くなつても、太陽は雲の中にも尙ほ存在して居る如くに、我が萬世一系の皇統は、存在してゐる譯でありますからして、其の萬世一系の皇統の周邊に、最も近く奉仕して居る所の公卿と云ふものを無視することの出来ないことと云ふことは、當然のことである。然るに天下が多事になつて、是れまで、黒い雲の中に蔽はれておゐて遊ばした天皇陛下の御稜威と云ふものを、直接に仰がなければならぬと云ふ時期になつた時に於ては、公卿の勢力と云ふものが、一層増大し來たと云ふことは、當然のことであります。

それで開國の問題が、愈々現實的になつて來た。幕府がこれを以て勅裁を仰がなければならぬ時に際

して、天皇陛下の御諮問に直接に奉答するものは誰かと云へば、公卿なのである。それで公卿は恰かも、天下の大事を決する最高顧問と云ふ場合に立つて居たのである。それでこれを無視するなど、云ふことの出来得る筈がない。斯うお話をしてみれば、其の公卿の中で、國家の最も重要な場合に於て、天皇陛下から最も御信用を受け、又た天皇陛下に最も純忠を盡して、君臣魚水の如くあつて、己れを忘れて天皇陛下に獻替したる所の三條公、即ち忠成公の如きは、實に維新の歴史に於て重要な部分を働き、又た百世に向つて磨滅すべからざる、大いなる足跡を印したお方と申さなければなりません。

丁度嘉永、安政の時に於きまして、孝明天皇様の側には、なか／＼偉い公卿が居た。其の公卿の最も偉い人は誰であるかと云へば、鷹司政通公、此人は偉い方であつて、即ち今日の西園寺公爵の曾祖父に當るお方である。此の方は實に偉い方であつて、關白職に在らるゝことも最も長かつた。又は皇朝の典故に通じられたことも、最も詳しく、年功と言ひ、見識と言ひ、學問と言ひ、何と言つても二つなき位置の人であつた。それで初めから孝明天皇様を、此のお方が御輔導申上げたのであります。天皇様から御覽遊ばすると、少し此のお爺さんは煙たい、一寸苦手であつた。あゝ又あの爺が出て来るのかと云ふやうな思召で、少し御遠慮遊ばされたやうな氣味があるやうに、これは私が拜觀した譯ぢやない、拜想した、私の想像です。併し此の想像は間違はぬと思ふが、さう云ふ譯である。お嫌ひではないけれども、少し苦手である。其次ぎには九條尙忠公と云ふお方がお出でになるが、是は英照皇太后様のお父

様、孝明天皇様には所謂る皇舅と云ふ立場に居る方である。此人もどつちかと申しますれば、別に孝明天皇様が何等お嫌ひになる理由はないけれども、何だか餘り打明けてお話になると云ふやうな譯ではなかつた。當時最も孝明天皇様の御信用になり、御相談相手になつたお方は、恐らくは三人ある。第一は近衛忠熙公、第二は即ち梨木神社の祭神忠成公、第三は御先々代の久瀨宮の朝彦親王、當時は青蓮院宮と申上げたお方である。此の御三人が最も孝明天皇様の御信用になり、何も彼もお打明けなされたお方ではなからうかと思ひます。宸翰を繰返して拜讀して見ますれば、此のお三方が最も御信用遊した方方である。而して此のお三方に於ても、近衛公は政治上の御相手と云ふよりも、御自分の先生であること云ふやうな風でおゐで遊ばして、御自分の信賴する老人と云ふやうなことであつて、憂きも惱みも、近衛忠熙公に向つてお打明け遊ばして、其中に御慰安遊ばすと云ふやうなことであつただらうと思ふのであります。云うて見れば、孝明天皇様のお胸のムシヤクシヤする時に、それを無遠慮にお打明け遊ばすと云ふやうな方であつた。それから青蓮院宮様は、即ち久瀨宮の御先々代は何れかと云ふと、政治上のことに就て、斯うしたらどうか、さうしたらどうかと云ふやうなことを、御相談になるやうな方であつて、専ら其方の側らしく私には受取れる。ところが忠成公はどうであるかと云へば、兩方である。或る意味に於ては近衛忠熙公に對するやうな態度を以て應對遊ばされ、或る意味に於ては青蓮院宮に對し遊ばすやうな態度を以て遊ばされる。云うて見れば、相談相手でもあれば、不平鬱憤のお漏らし所でもある。何

もかもお打明け遊ばしたと云ふやうなことであつて、親しみ且つ信じ、信じ且つ親しみ、何とも申され
ないやうな御關係であつたと思ふのであります。

此の如く孝明天皇様から、御信用と云ふてよいか、御親愛と云ふてよいか、御信任と云ふてよいか、
凡有るものをお受けになつた忠成公は、どう云ふ譯でさう云ふことになられたかと申しますれば、これ
は御先代の仁孝天皇様からして、矢張り御同様である。仁孝天皇様から既に純忠の士と御沙汰あらせら
れた通りのことであつて、純忠は混りなき忠臣と云ふことであり、それが第一の資格である。のみなら
ず忠成公は、實に練達堪能のお方で、典故とか事情とか、所謂朝廷の御儀式に就ては固より詳しい。
鷹司公は別として、誰も殆んど及ばない。そのみならず武家傳奏をおやりになつて、凡有る方面に御交
際があつた爲めに、所謂現在の政治の實情にも、最も通達して居られる。又た非常に寛大なお方であ
つて、物の分りのよいお方であつたからして、誰も彼れも自分が持つて居つたものは、忠成公に向つて
皆な提供した。所謂四門を闢き、四目を明にし、四聰を達しておゐでになる。それで凡有るものが種々
の知識を持込んで來たからして、よく種々の事情に通じて居ります。それで其人は純忠、己れを捨て、
君に奉ずると云ふ人である。其人は、朝廷になくてならない所の典故、其他の事に就て、よく通曉して
居る。其人は國家多事の時に於て、時局に對する所の知識を持つて居られる。これだけの資格のお方
であつたからして、御信用があつたと云ふことは、私は當然のことと思ふ。斯う云ふ風に考へて居るので

あります。

御承知の通り三條家と貧乏と云ふものは、殆んど附ものだ。三條家にお金が無いと云ふことは、もう
京都ばかりでない、相當の知識のある者は皆知つて居る。元來武家傳奏など云ふものをして居れば、
賄賂など云ふものは、呉れと請求しないでも、向ふから持つて來るんだから、黙つて取つて居さへす
れば、相當の金持になれる。公卿のお方の中にも、武家傳奏をやつて、餘りに賄賂を取り過ぎて、孝明天
皇様の勅勘に觸れたお方もある。其のお方にも子孫がおゐでになるから、其のお名前を此で申すことは
憚りますが、取らない方だけは申しても差支ないと思ひますから、私は申します。

元來公卿は其の位ばかり高くて、収入が少ない。位と収入と、どうしても釣合はない。其の釣合はな
い所に大いなる悩みがある譯なのである。其悩みを癒やす爲めにはどうするかと云へば、賄賂を取ると
云ふより外に道はない。固より昔の公卿は、例へば歌留多をお作りになるとか、又は此家は斯う云ふ技
術の家とか、此家は斯う云ふことの御家と云ふやうなことであつて、其の免許料で大概収入を立てるこ
とになつて居る。けれども免許すべき資格を持たない人はどうするかと云へば、どうも外に仕様がな
い。要するに公卿を維持すると云ふ道は、先づ賄賂である。だから賄賂を取ると云ふことは、公卿に於ては、
殆んど是は特權のやうになつて、誰も公卿が賄賂を取つたと云つて、悪いと云ふものは一人もない。吾
吾が三度の食事をして悪いと云ふものゝないのと同じことである。然るに取らないと云ふ人は、まる

で斷食でもしたやうな人である。

皆様方に其例を一言に申しますが、安政五年戊午の歲に、條約問題に就きまして、堀田備中守と云ふのが京都に参りまして、種々運動をした。其時に孝明天皇様が、九條關白に宸翰を賜はつた中に、斯う云ふことがある。『今度聞く所に依れば堀田が運動に来るさうだが、来るには少なからざる所の準備を持つて来るさうだ。就ては朕も種々の贈物を濫りに受けようとは思はないから、此節は關白に於ても其の積りで、餘り取らずに居て呉れ』斯う云ふ宸翰がある。私の申し方は餘りに露骨でありまするが、意味は其通りである。それで賄賂を取ると云ふことは、御上さへも内々は御承知になつて、所謂公然の秘密となつた。斯う云ふことである。然るにどうしたお方か忠成公は、そんなことはやらなかつた。金持だからやらなかつたぢやない。貧乏だからやらなかつた。又やらなかつたから貧乏であつた。斯う云ふ時に於ては盲の世の中である。片目でも威張ることが出来た。況んや賄賂を取ると云ふことが、當り前の世の中で、賄賂を取らずに清く、正しくやつて行くと云ふことは、是は非常な人である。もう外のことは何も無くとも、それだけでも大變取柄である。それで私は、御上が矢張りさう云ふ點に付て、餘程御信用遊ばされたのである。従つて三條家には、内々御手許金が下がつてゐたであらうと思ふのである。餘り立入つて申上げるやうでありまするが、どうもさうらしい。

それで一口に申しますれば、忠成公は中庸穩健、清明の良質であつた。どう云ふお方であるかと云ふ

ことに就て、橋本左内、即ち當時の最も勝れたる人であつて、維新改革の時代に於て、長者としては藤田東湖をして舌を卷かし、同輩としては西郷隆盛をして、頭を下げしめた所の橋本左内、丁度只今東京では其の展覽會をやつて居りますが、此の橋本左内其人が、矢張り安政五年二月京都に参りまして、種々運動をやつて居りました。忠成公にもお目通りを願つた人でありまして、其ことに就ての事は忠成公の御履歴の繪巻物が、只今丁度御當地の博物館に展覽會があつて、宮内省から御貸下を願つて陳列してあります。お序であつたならば、皆さん方行つて御覽になると、橋本左内先生が、三條實萬公に向つて、天下の大勢をお話する所の繪が見られます。丁度二十五歳の青年ですけれども、二十六歳で死にましたから、二十五歳の青年と云つても、もう既に吾々共より年を取つた位である。私はまだ來年は死なないですから、私よりも或點から云へば年を取つて居る。其の橋本先生が話をした時に、所謂膝の進むを覺えずと云ふやうな趣きで、忠成公がお聴き遊ばした所の繪が描いてある。其の左内先生が忠成公のことを江戸に報告をした手紙がある。此の手紙を私が此で讀みます。是はまさか橋本先生が、今夕私が讀む積りで書いたんぢやない。若し斯う云ふ場所で披露する積りであれば、語をもう少し慎んで書いたのではない。これは三條家の方々やら、三條家に同情のある方々に見せる爲めに書いたのではない。これは政治上の報告書である。自分が實際考へたことを、其儘書いたのである。頗る無遠慮である。又た橋本先生と云ふ人は、實に無遠慮な人で、自分の主君の春嶽公にさへ、我君は正直であるけれども、勇氣が足ら

なくて、兎角物事を思案分別ばかりして、斷と云ふことが缺けて居る。もう少しハッキリしなければいかぬと云ふことを書いて居る位である。自分の君に對してさへ其位でありますから、忠成公に對しては相當の批判を加へて居る。それで此人が悪く言つたことがあるからして、此人がよく言つた事と云ふものが、愈々確かであると云ふことが分かる。總てよく言つて居れば、これはオベツカであると、或はお考へになるか知れませぬ。これは忠成公から餘り御馳走を頂いたから斯う云ふことを書いたであらうと、或はお考へになる。併し此位自由自在に言うて居るからして、十二分に信用するに足ると思ひますから、此で私が讀みます。

三條公御人品、品格溫雅寬平、御年は五十六。御軀幹不肥、瘦候得共、亦甚度少にも候はず。先づ中人體に御座候。

御人品は溫かに雅にして、寛かに平らで、御身體は餘りデブ／＼肥つておゐでにならぬ。又餘りにちつぽけに瘦てもおゐでにならぬ、丁度中肉中脊と云ふやうな御軀である。

流石事慣候御方故、圓熟之狀餘りて、鋒角稜々可恐方は無之、易就之氣味有之候。

流石に物事にお慣れになつて居るお方であつて、何事も圓熟して、角があつて突當ると云ふやうな、恐いお方でない。橋本左内先生が恐いやうな人間と云ふものは、當時一人も居らなかつた。決して忠成公ばかりでない。寧ろ外の者が橋本先生を恐い。現に川路左衛門尉の如きは、——川路と云ふは御承

知の通り、もう其時には非常な偉い人で、幕府の役人としては古狸、餘程此人はしたゝか者である——其の川路が橋本に會つて、顔半分切取られたやうな氣持がしたと、斯う云つた位である。其の橋本先生だから、忠成公に會つて恐がる氣遣ひない。

三公之官は例格よりは長御勤に相成、世間には格別御規模之事と申居候。

内大臣におなりになつて、普通はちやんと任期があつて、お罷めにならなくちやならない場合があつたけれども、忠成公だけは普通の人の任期よりも、長くお勤めであつた。これは定に陛下の御信用が厚く、又た御用ひ方が重かつた人であると書いてある。

御同志は、青蓮院宮様、中山様、久我様、徳大寺様、萬里小路様位にて、其中、中山様には別して御懇之由。池内大學陶所と號す御懇意に參殿は申候へ共、機密十分には御打明無之由。

池内大學と云ふのは、御承知の通り池内陶所と云ふ。これは三條家に出入りしたものでありまするが、これもお近付けにはなるけれども、決して機密を御打明けにはならない。池内大學と云ふ人は、安政戊午の大獄には、噓か本當かは別問題として、同志を幕府に沾つて自分が助かつたと云はれて、後から暗殺された人である。私はそれ程の悪い人とも思はないけれども、餘り意志の鞏固な人とも思はない。流石に忠成公で、此者には機密をお打明けにはならなかつたと、斯う書いてある。

御性質御伶俐故、隨分申上候事は、能御分り被成候得共、長袖故歟、勇邁に乏しく、見幾而作と申

果決は一向御見受不_レ申。

此が非難の所である。惻巧なお方だから理窟だけは何を申してもお分りになる。併し何を云ふても長袖の公卿であるから、腕捲りしてサア今からやらうと云つて、肘をからげて飛出すと云ふやうな氣分がない。

俗人より申候はゞ、宜御人にて、何やら氣象に可_レ畏處もあると申位、英傑より申候はゞ、優柔と小規模之二端は不_レ免御人と奉_ニ察上_ニ候。

俗人から云へば實に恐いお方と云ふかも知れませぬが、豪傑の目から見れば、少し弱々しい所があつて、器が小さい、斯う云つて居る。

共語_ニ大事_ニには遺憾有_レ之候。

所謂顛覆でもやらうと云ふやうな話合には、此人は加へることがいかぬと云ふことである。

其上衆善兼採之徳よりして、邪正混淆之患可_レ有_レ之と被_レ察候。

此お方は人を選ぶと云ふことは、善い者も悪い者も同様に、自分の腹の中に持込むと云ふやうなことであるからして、どうもハツキリ正邪を分つと云ふことが無いことが心配だと云つてゐる。併しこれは私は橋本左内と云ふ人は二十五歳、忠成公は五十七歳、祖父さんと云ふことは出来ないけれども、お父さんの年齢、年齢の相違であるから私は強ちこれは無理からぬことであると思ふ。併し私から申せば、

忠成公の偉い所は衆善兼採と云ふ所である。忠成公に限つて黨派心と云ふものはなかつた。井伊からやり付けられて、あゝ云ふひどい目にお逢ひになつたけれども、井伊とも懇意であつた。水戸の烈公とは尙ほ懇意であつた。夢にまで烈公を見た_と云ふ位である。

併徹上徹下正論に被_レ赴候御人には相違無_レ之。

先年、仁孝天皇様よりも精忠と申被_レ蒙_ニ叡感_ニ御賞に御預被_レ成候事も有_レ之候由。仁孝様には格別御倚頼被_レ遊、其頃禁中御式事など一切御一手にて御裁し被_レ成候由。方今の主上には、御幼年之頃より御傳にて、御習書杯之義に付ても御世話被_レ成候由。依て知遇も不_レ薄義歟と奉_レ存候。

昨暮も某公を後見に被_ニ仰付_ニ候はゞ、幕府之御爲に可_ニ相成_ニ別紙にて_一知候筈_一 皇國之御都合も宜しからんと申御上書御座候て、則ち先夜_{微臣へ内}拜見被_ニ仰付_ニ候。

當年御上書は、何分公武御嫌疑有_レ之候ては不_ニ相成_ニ天朝よりは幕府之不_ニ行届_ニ處御世話可_レ被_レ成筈、幕府よりは又天朝を御介護可_レ申事肝要に候。借當節は非常之御時節故、關東にては追々非常之改革被_レ致候由。別して今般墨使之登城も、寛永度之例にて出來候事故、其頃之如く將軍家にも上洛等有_レ之、御直に御對談有_レ之候はゞ何事に御嫌疑も不_ニ相生_ニ甚御都合可_レ宜。就ては時節柄故可_レ成丈、事輕に相成、將軍にも、列候にも供廻始可_レ減丈けは滅却被_レ致候方可_レ然。無_レ左時は疲弊も彌増相加可_レ申奉_レ存、云々様之御趣意に候。

此書にても典故に實に御了通は分明に相分り申候。其外皇朝之御記録類には、至て御博識之御様子に被_レ考候。此度狂歌に『三文も梨の木町の天保錢。忠義之事は百も御承知』と申候。御内證貧と申候へ共難_レ信この歌に就て橋本先生は註釋を加へた、『御内證貧と申候へ共難_レ信』見た程の貧乏であるまい、大概やつて行けるだらうと斯う註釋を加へた。

御殿號を俗に轉法輪と申居候。梨木町は御住居所に御座候。又此頃之雜説に、三條家の門に無二膏の廣告を塗付、傍に『公家の大出來物』と書付置候由。俗間評判は如_レ此宜御座候。

橋本先生も徹上徹下正論に與みする御人である。即ち純忠の方、只だ勇氣が少し足りない、もう少しハツキリして欲しい。正論潔白であると云ふことは間違ない。此の狂歌の通り所謂公家の大出來物で、無二膏を貼つて、切開しなければならぬ大きな出來物、斯う云ふ譯である。實に立派なお方である。ところが此お方までもたうとう幕府の方からやかましく云つて蟄居を申付、落飾を申付け、遂に一乗寺村で安政六年十月六日、五十八歳にしてお薨れになつた。これ程の立派なお方であれば、此お方がどうしても梨木神社の所謂祭神にお成り遊ばすと云ふことは、私は當然のことと思ふ。實に斯う云ふお方があつて、孝明天皇の盛徳を裨補し、斯う云ふお方があつて、維新の大業を翼成された譯である。

これから第二の祭神の事に就て、少し申上げて見たいと思ふ。この方は近代の方であるから、皆さん方も御承知である。近代と申しても、私が申す近代であります。此にお出でになる清浦伯のお目から云へば

尙ほ近いですが、皆さんの中の若いお方にはそれ程近くはないかも知れぬ。

三條實美公が、忠成公の後をお繼ぎになつた時には、丁度二十三歳、もう其時に實美公が立派なお方である。坊さんの言葉に、好兒爺錢を使はずと云ふ語がある。良い忰は親父の金は使はない。自分自分で行く。實に其通りである。此のお方は忠義だけはお父さんの通りやつて、尊皇だけはお父さんの通りやつて居る。併しお父さんと大分違ふ。此人は所謂過激黨で、穩健ぢやない。初めから此お方は過激黨である。忠成公は現狀を維持した儘で、改良して行かうと云ふお方で、實美公は現狀を打破して、さうして改良して行かうと云うのである。親父さんと息子さんは、目的は同じことだけれども、方法は大變な違ひである。現狀を維持して、徐ろに改善すると云ふものと、現狀を打破して急に改良すると云ふものとは大分違ふ。それで始めから實美公は調子が違つてゐた。家を繼がるゝと同時に、殆んど急進黨の首領になつた。もう二十三で首領になつたと云ふことに就ては種々の理由もありませうが、第一は三條公は門閥である。家柄がよい。五攝家の中にはどうも急進黨と云ふものは出ない。明治時代になりましてから、先代の近衛公爵の如き、随分對講同志會など、云ふものを作つて御運動になつたことがあります。維新の時には五攝家には急進黨が出来ない。五攝家の次ぎの家柄に付ては、三條家など、云ふものが屈指である。其の三條家のお父さんは所謂有名なる忠成公である。其のお子様である實美公と云ふお方が、どうもこれは様子が違つた急進黨である。皆の心がそれで實美公に集まつた。公卿は

かりでない。公卿を取り巻く天下の有志者と云ふものは、自然、三條公を仰いで、三條公は何時とはなしに、首領におなりになつた譯である。

それで三條公の最もお働きになつたのは、文久二年である。文久二年の十月に、三條公は姉小路卿と與に勅使となつて江戸に下られた。さうして其の十二月には歸つて復命せられた。元來御承知の通り文久二年の夏には大原三位が勅使となつて、島津三郎公がそれを擁護して江戸に下つて、相當の事はやつた。復命もした。然るにそれが手緩いから又遣り直すと云ふ勢ひで、同じ年に又た三條公と姉小路卿が行かれた。其時の勢ひと云ふものは素晴らしいもので、三條公が江戸に下られて、千代田城に乗り込まれて、將軍及び其の周圍の者に向つて、攘夷の期限を定めると云ふことゝ、御親兵を作れと云ふやうなことに就て、それゝ申達せられたが、實に其時の勢ひと云ふものは凄まじい。三條公のお書きになつたものを、只今展覽會に行つて御覽になれば分ります。私も本日拜見しました。實に立派なものであるし、又何となく御優しく出来て居る。併し其の時分の御氣性は、實に激しいものだ。本當に急進黨の首領である。それから幕府の頭を一つ毆つて、さうしてお歸りになつて復命した。扱て翌文久三年は今より七十三年前で、實に其時の時勢と云ふものは、急轉直下である。私は文久三年の一箇年のお話を貴方がたにして見たい。此の文久三年と云ふ年は、實に面白い年でありまするが、残念ながら今夜其のお話をする時間がない。それで其中の只一と事か、二た事だけ申して置きます。

其の時分の京都は、今日のやうな平和な京都ではなかつた。暗殺などゝ云ふことは朝飯前だ。一寸出れば直ぐに首が曝されてゐると云ふ位なものである。有名な人も殺されたし、又餘り有名でない者も殺された。或は辻斬りにされた者もあるし、實にどうも盛んなもので、生きた者ばかりでない。死んだ足利將軍の首さへも斬つて曝された位である。其の時分に幕府に向つて攘夷の期限を定めると云ふことを申込まれた。さうして寛永年間以來將軍と云ふものは、未だ嘗て西に向つて行つたことのないものを、たうとう京都まで引寄せて、入洛させた。さうして三月には將軍が京都に来て參内し、其の三月十一日には賀茂の行幸と云ふものがあつた、これも御上には珍らしいことで、天子様の賀茂行幸と云ふものがあつた。四月十一日には石清水の行幸と云ふものがあつた。五月の十日には馬關で攘夷を始めた。攘夷の期限が五月十日と決まつたから、長州人が期限通りに、約束通り、英艦に撃ちかけた。さうして五月の二十日には姉小路卿が暗殺された。其時には三條公も當然暗殺さるべき運命であつた。姉小路卿が先づ身代りと云つてよいか、或は天運と云つてよいか、何れにしても三條公もやられる筈の人が其の時助かつた。實を云へば三條公は文久三年に、もうお薨れになつても、一人前の仕事は出来た。それから先きは、實は儲け物のやうなものである。命拾ひをなすつた。併し拾つた命の方が、是迄の命よりも有効に働かれた。其の年には六月に、小笠原壹岐守、其時は圖書頭と云つて居りました、——今の小笠原長生子のお父様——此人が幕府の兵隊を以てクーデターをやりに來た。愚圖々々云ふならば兵隊で叩き潰す

と云ふ勢ひで、淀まで来たので留められた。此人は其爲めに謹慎を申付けられた。將軍はコソ／＼として江戸に歸つてしまつた。七月の二日には、鹿兒島では英吉利との戦争があつて、八月十三日は愈々大和行幸、天皇様が神武陵を御親遊ばされ、春日神社に御駐蹕遊ばされて、攘夷の大詔を發し給ふと云ふことになつた。實はこれは大和行幸と云ふことで、御上に大和御駐蹕を乞ひ奉り、さうして討幕の戦をやる筈であつた。此の策士は眞木和泉守と云ふ人であつて、三條公や何か其話をどの位の程度に御承知であつたかと云ふことは、私はハッキリ申すことは出来ない。全く御承知でなかつたとも云へない。又全く御承知であつたとも云へない。あつたと云へばあつたかも知れない。なかつたと云へばなかつたかも知れない。幾らかその匂ひ位は嗅いでおゐてになつたと云ふことは、私は疑ふことは出来ない。さう云ふ譯であつて、此勢ひで、所謂急進主義の打破政策を執つて、現状を打破すると云ふことになつた。ところが先代の三條公の御親友であらせられる、先々代の久邇宮、即ち朝彦親王と云ふ方は、さう云ふ過激のことは宜しくないと云ふ御議論、それから薩摩の意見もさうだ。會津の意見は勿論さうなのである。それで下に於ては薩摩と會津との約束が出来る。上に於ては朝彦親王が御承知になつて、それには二條公、徳大寺公、さう云ふ方々も賛成せられて、たうとう中川宮即ち朝彦親王より孝明天皇様に、今度の大和行幸と云ふ事は、只事ではありませぬ。御上は只だ神武陵を御親遊ばすお積りかも知れませぬけれども、實は斯く斯くの陰謀がありますと云ふことを申上げられたから、御上も御驚き遊ば

されて、そこ迄やつては困る。朕も實は此間から氣に食はない事が澤山あるけれども、皆がやかましく云ふからして、致方なく許したこともあるが、朕の考へはさうではないから、大和行幸は中止せよと云ふことになつて、此に始めて御承知の通り一種の政變が起つた。即ち八月十八日の政變である。十八日に長州は堺町御門の守衛を免ぜられ、滯京を許されぬことになり、七卿方は妙法院にお集りになつて、遂に長州にお下りになつたと云ふことになつた。此の経緯と云ふものは、維新の歴史の非常な眼目である。此位面白いことはありませんけれども、今夜此話をすれば、三條公の話でなくして、其方になつて仕舞ふ。已むを得ず此の面白い所だけ抜かすことに致します。

それで京都をお去りになつた。これから形勢が一變した。これまでは、京都は所謂尊皇攘夷と云ふものゝ中心點になつて、急進黨が朝廷の勢力を持つてゐて、朝廷の命を以て天下に號令して來た。然るに文久三年八月十八日以後の朝廷は、所謂會津、薩摩及び中川宮、二條、徳大寺さう云ふ人々の意見に依つて、穩健派が勝を制した。それ以來三條公は、始めは周防にお出でになり、次ぎには長府にお出でになり、次ぎには海を渡つて赤間驛にお出でになり、遂には太宰府にお出でになつて、太宰府に長い月日をお過し遊ばした。其前に元治元年に、三條公其他の方々は、京都にお上りになるお積りで、舟にお乗りになつて、讃州多度津に碇泊の時に、所謂、元治元年七月の禁門の變と云ふものをお聞きになつて、これぢや堪らないといふのでお引返しになつた。それから先きの御困難と云ふものは、實に云ふ

に忍びない。兎も角も三條公は文久三年の八月から、慶應三年十二月京都にお歸りになる前、四年四月と云ふものは、所謂る流浪の身でお暮しになつた。此の四年四月と云ふ歳月は、三條公に取つて非常なる修練の時代、所謂る他日大いなる三條公を造り出したと云ふのは、三條公が妙法院からして、蓑を著、草鞋を穿いて、西に向つてお往きなされて、さうして造次頭浦も所謂る辛酸をお嘗めなされた間に人物が出来上つた。年齢から申して見ますれば、此間が二十七歳より三十一歳、三條公が凡有る試練を遂げ終つて、堂々として再び京都に乗込んでお出でになつた時には、三十而立、所謂る三十一の時である。此の時代のことを詳しく申すと、又これは歴史になるから申上げませぬが、私は總體論を只技に申して置きます。

それならば此の四年四月と云ふものは、三條公は自分の人間を立派にする爲めに苦勞なされただけの事であるかと云へば、三條公が丁度軍人になる爲めに、士官學校にお出でになつたやうなものである。海軍兵學校にお出でになつたやうなものである。或は青年訓練所にお出でになつたやうなものである。併しそればかりではない。そればかりなら別に私は左程申すことはない。只だ其の以外に三つの大いなる事がある。三條公等の所謂る西に御落ちになつた結果として、擧ぐべきものは、第一は三條公等の周邊を廻つて、尊皇運動の中心點と云ふものが出来た。三條公其他の方々に、凡有る全國の勤王家が自然に集り、消息を通じ、謂うて見れば其所が勤王家の手形交換所のやうな所になつた。皆が其所に集

まつて、其所が自然に全國勤王家の運動點になつた。

第二は長州の俗論黨を退治する時に於て、三條公等が、西に下つてお出でになつたと云ふことが、非常な力になつた。若し三條公等がお出でがなかつたならば、如何に高杉晋作など、云ふ人が偉くあつても、如何に山縣公や伊藤公、井上公、木戸公は申す迄もない、廣澤公其他の長州の先輩が偉くあつても、長州の俗論黨と云ふものはなか／＼偉いものであつた。俗論黨にも偉い人が居つた。それで其の俗論黨が、屢々長州の藩論を占めた。然るに其の俗論黨を退治して、正義黨の勢力を盛返し得たと云ふものは何であるかと云ふと、三條公方を此迄引張つて連れて來て置いて、俗論黨に天下を占めさせては、長州男子の面目が立たぬ。早く俗論黨を退治しろと云ふことであつて、即ち此の三條公等がお出でになると云ふ其事自身が、長州に於ける正義黨の旗印になり、正義黨のインスピレーションになり、正義黨の進軍喇叭になつた。

第三は、これで薩長聯合が又た自然に出來てきた。直接に三條公が、薩摩人の手と、長州人の手を握り合はしたと云ふことぢやない。併しながら太宰府に三條公がお出でになる時にも、三條公が三田尻にお出でになる時にも、又た長府の功山寺にお出でになる時にも、薩摩の正義黨と長州の正義黨とが、自然に其所に相ひ近付かざるを得ざる場合になつて、然かも三條公の周邊に在つた中岡慎太郎、土方久元など、云ふやうな人々が、兩方を自然に合するやうな形勢を造り出した。即ち薩長聯合と云ふものが出來

た。固より三條公等の爲めばかりぢやない。併しながら與つた力は少なくない。此の三つのものが、私
が數へ上げる主なるものである。

併し七卿と申し、或は五卿と申す外の方々を小さくするぢやない。三條公以外の方々も、皆な相當の
方々である。併しながら三條公は實に孤鶴の鶏群中に在るが如き立場である、鶏の中に在る鶴である。
其鶴と云ふは何かと云へば、所謂る品格と云ふものを持つてお出でになる。三條公の前に立つ時に於て
は、何人も邪なる心、さもしき心、下司張つた心と云ふやうなものは、持つことの出来ない程に、立派な
品格の方である。それで何人も三條公に向つては、敬畏の念を懐かない者がなかつた。其の品格の力と
云ふものが、嶄然と高く聳えて居つたからして、自から天下の志士の望みを繋ぐやうになつた。大分話が
長くなりましたから、もう是で終りますが、只だ最後に一言申し上げます。

公卿の勢力は、前申した通り實に重大なるものでありましたけれども、三條公一人の力では、どうも
十分な事が出来なかつた。更に腕前に於ては、三條公よりも、より大いなる岩倉公と云ふ人があつた。
門地は三條公より低くあつたが、氣魄と云ひ、經綸と云ひ、政治的手腕に於ては、三條公は勿論、士族
の仲間に於ても、大名の仲間に於ても、維新の政治家中に於ては、殆んど超群絶倫の一人と云ふ岩倉公
が居られた。ところがそれ程の腕前の岩倉公であるけれども、岩倉公一人では出来ない。所謂る寸も
長ずる所あり、尺も短き所あり、如何に岩倉公が偉いと云つても、三條公の徳望を加へない以上は、ど

うしても一緒になることは出来ない。力を合はすことが出来ない。

そこで此に始めて、三條、岩倉の聯合と云ふものが出来た。所謂る團體としては薩摩と長州の聯合、
個人としては三條と岩倉の聯合が出来て、始めて皇政維新と云ふものが、首尾よく行はれた。此點から
して三條公が如何に大いなる働きを維新の政變、改革にお盡しになつたか、窺はれる。それで此點に就
て一言申しますれば、三條公は、岩倉公が大嫌ひだ。岩倉公といふ方は、所謂る臨機應變黨と人から
見られたのも無理はない。和宮様の御降嫁なども、岩倉公の運動で出来た。それで有志家は、所謂る奸
物の巨魁と、斯う考へてゐた。其爲めに勅勘を蒙られた位である。それで三條公も、さうお考へになつ
たが當然である。併し岩倉公と云ふ人は非常なる人である。常に人の考へて居る所よりも、一ツづづ先
きを行つた人である。もう何時の間にか幕府の助くべからざることを承知して居る。それで勅勘の身で、
岩倉村に幽居しながら、天下の志士に結んで、所謂る風雲を呼び起して、經綸を行ふ時を待つて居られ
た。其時に於て、中岡慎太郎が岩倉公に會うて、——中岡も岩倉公を嫌ひ、矢張り奸物と思つて居たが
——逢つたら吃驚した。公卿の中に斯う云ふ人が居るか。これは偉いと感激した。それで歸つて三條
公に申上げて、斯う云ふ漢である。どうぞ握手をして頂きたいと云つた。さうすると三條公は、彼は奸
物の巨魁だ、厭だ。斯う仰しやつた。中岡は、いやそれは仰せであるけれども、さうではない、あれ
は奸物ぢやない。本當にあれば日本の爲めに働く、朝廷の爲めに働かうと思つて居る漢だ。和宮の御

降嫁も、あれからして幕府を段々攻めて、改善の政治を行はせようと考へたので、決して幕府に阿つた譯ではありませぬ。斯う云ふことを云つた。さうすると東久世さんが其所に居られた。所謂る七卿の一人である。そして云はれるには、それは全く其通りであります。岩倉は決して奸物ぢやありません。私も實は是れ迄彼の事はよく承知して居りますけれども、私とは同族である。親類である。滅多なことを云へば、親類に最負すると思はれるから黙つて居りましたが、只今中岡が申す通り間違がありません。かから、一つ手をお握りなさいと云ふことであつたから、善に従ふこと流るゝが如き三條公が、手紙を書いて中岡に渡した。それを中岡が岩倉公に持つて行つて、さうしてお二人の提携と云ふものは成つた。所謂る薩長の提携に依つて幕府を倒すばかりでなく、維新政府を盛り立てたと同様に、三條、岩倉の提携に依て維新政治と云ふものはうまく行つた。薩長だけならば、丁度茶碗と茶碗、打當る時には互ひに打割れることになつたかも知れぬ。然るに三條公、岩倉公、斯う云ふお方々が、廟堂の上に立つて、公平の態度を以てやられたからして、薩も長も自から提携すべき所を提携し、兎や角當時の明治政府を維持して來た。さうして今日の隆運を效した。公卿の力も亦多としなければならぬ。即ち三條公も公卿である。岩倉公も公卿である。

私は最後に申し上げます。如何に三條家と云ふものが私の無い家であるか。所謂る己れを捨て、國の爲め、君の爲めを思ふ方であるかと云ふことの、一つの證據を申し上げます。

明治十八年十二月、日本に内閣制を設けた。それまでは三條公は太政大臣である。然るに三條公は、自から表を奉つて、最早太政官制の昔の式ではないかない。所謂る責任内閣制を採らなければなりません。が、それに就ては、菲才私は當る所でありませぬから、適當の者を何卒御任選下さるやうにと云ふ上書を捧げられた。即ち自から太政大臣の職を退き、さうして伊藤公を推して、内閣總理大臣たらしめた。其の雅量、其の無私公平なる態度、實に天下の人臣と云ふものは、此の如き心を以て國に盡し、君に仕へねばならぬと云ふことであらうと思ひます。即ち此點を見ても、實に三條公は御父君の忠成公の子たるに愧ぢざるばかりでなくして、其の御先代の志を、異なつたる方法を以て、能く成就せられたるお方と申さなければならぬと思ひます。今夕のお話は之を以て終りと致します。(終り) (拍手)

(文實在速記者)

昭和十一年四月一日印刷
昭和十一年四月廿九日發行

非賣品

編輯兼
發行者

梨木神社鎮座五十年記念祭奉贊會

印刷人

東京市京橋區銀座西八丁目五番地
齋藤計吉

印刷所

東京市京橋區銀座西八丁目五番地
民友社印刷所

發行所

京都市寺町通廣小路・別格官幣社梨木神社内
梨木神社鎮座五十年記念祭奉贊會

終

